慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「頸ねぢきッて」という表現をめぐって：源為朝・巴・畠山重忠
Sub Title	
Author	須藤, 敬(Sudo, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.47 (2008. 6) ,p.1- 19
JaLC DOI	10.14991/002.20080600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20080600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「頸ねぢきッて」という表現をめぐって

―源為朝・巴・畠山重忠―

須藤　敬

覚一本『平家物語』は、巻九「宇治川先陣」の畠山重忠と「木曽最期」の巴に「頸ねぢきッて」という表現を用いている。敵の首をとる描写が数多くある中で、「ねぢきる」はこの二例しかない。軍記物語の各テキストはその成立に際し、先行本文をどのように取捨選択するのか、あるいは何らかの理由の下、新たな表現を用いるかの判断を求められたであろう。それはまた後出の本文作成にさらなる選択肢を与え、その使用方法の検討を迫ることになる。小論ではそうした問題を、「頸ねぢきッて」という表現に即して考えようとするものである。

一　覚一本『平家物語』における首をとる表現

始めに首をとることを言う類型的表現とその使用法の違いを確認し、それらに対する「頸ねぢきッて」という表現の相対的位置を押えたい。また覚一本において類型表現が繰り返される様相を見るため、ほぼ同じ表現がある場合は並べて示した。まず「頸をきる」・「首をはぬ」という表現から見ていく。

I　「頸をきる」

＊（清盛は）「しやつ（西光）が頸、左右なくきるな。よくよくいましめよ」とぞ宣ひける。〔巻二〕

＊（宗盛は）「…まづ競めをいけどりにせよ。鋸で頸きらん」とて、踊りあがり踊りあがり、いかられけれども…。〔巻四〕

＊（重衡は）高声に十念となへつつ、頸をのべてぞきらせられける。〔巻十一〕

＊（土佐房が）「…唯御恩にはとくとく頸を召され候へ」と申しければ、「さらばきれ」とて、六条河原にひきいだいてきッてンげり。ほめぬ人こそなかりけれ。〔巻十二〕

＊（盛嗣が）「…ただ御恩にはとくとく頸を召され候へ」と申しければ、「さらばきれ」とて、由井の浜にひきいだいて、きッてンげり。ほめぬ者こそなかりけれ。〔巻十二〕

これら十七例あり、捕らわれた者を対象として用いられる場合が多い。

II　「首（かうべ）をはぬ」

＊（重盛が）「あははや、成親卿が首をはねられたるな」と宣へば…。〔巻二〕

＊（清盛が）「…頼朝が首をはねて、わが墓のまへにかくべし。それぞ孝養にてあらんずる」と宣ひけるこそ罪ふかけれ。〔巻六〕

＊平治に信頼はさばかりの悪行人たりしかば、かうべをはねられたりしかども、獄門にはかけられず。〔巻十一〕

「はぬ」は、首よりも「かうべ（頭）」を刎ねるという言い方の方が多く、両者を合わせると十五例ある。「きる」と同様、多くは捕らわれた者が対象で、罪人を処刑するというニュアンスが強い。戦場で首をとる場合は「頸をうつ」・「頸をかく」と表現される。

Ⅲ「頸をうつ（うちおとす）」

＊（頼政が）渡辺長七唱を召して、「わが頸うて」と宣ひければ、主のいけくびうたん事のかなしさに…。〔巻四〕

＊（瀬尾は）打物ぬいて、先づ小太郎が頸打ちおとし…。〔巻八〕

＊（岡部）六野太うしろより寄ッて、薩摩守の頸をうつ。〔巻九〕

＊（義盛の童は）、景経がうつ太刀に甲のまッかううちわられ、二の太刀にくびうちおとされぬ。〔巻十一〕

これら七例あり、敵であれ味方であれ覚悟を決めた者を対象とした場合と戦闘で相手を倒す場合とがあるが、共通点は一刀のもとに首を落とすという点にあろうか。

Ⅳ「頸をかく」

＊（兼綱は）きこゆる大力なりければ、童をとッておさへて頸をかき…。〔巻四〕

＊越中前司盛俊は…大力なり。されば猪俣をとッておさへてはたらかさず。猪俣…既に頸をかかれんとしけるが…〔巻九〕

＊薩摩守…熊野そだち大力のはやわざにておはしければ…、六野太を…とッておさへて頸をかかんとし給ふところに…。〔巻九〕

＊（熊谷は敦盛に）おしならべてむずとくんでどうどおち、とッておさへて頸かかんと甲をおしあふのけてみければ…〔巻九〕

戦場で敵の首をとるとは、相手を組み敷いて刀で首を掻き切ることであった。十五例あり、「とッておさへて」という表現とセットで用いられることが多い。またそれをなす主体が「大力」とされるケースが少なからずあるのは、相手を押さえ付けるという行為に必要な属性だったのであろう。首をとるための前段階として、矢で敵を仕留める「しや頸の骨を射る」という表現も四例ある。

Ⅴ「頸の骨を射る」

＊今井四郎兼平おッかかッて、しや頸の骨を射て射おとす。〔巻八〕

＊監物太郎…まッさきにすすんだる旗さしがしや頸の骨をひやうふつと射て、馬よりさかさまに射おとす。〔巻九〕

＊那須与一…よッぴいてしやくびの骨ひやうふつと射て、舟底へさかさまに射倒す。〔巻十一〕

以上の、どのように首をとるかという表現群に対し、ただ首を「とる」と表す場合は、首の確保という事実自体を指す。十

八例ある。

VI 「頸をとる」

＊（以仁王は）御馬より落ちさせ給ひて、御頸とられさせ給ひけり。〔巻四〕

＊明雲大僧正、円恵法親王も御馬より射おとされて御頸とられさせ給ひけり。〔巻八〕

＊（瀬尾は倉光の）鎧の草摺ひきあげ、つかもこぶしもとほれとほれと、三刀さいて頸をとる。〔巻八〕

＊（猪俣は盛俊の）鎧の草摺ひきあげて、柄もこぶしもとほれとほれと三刀さいて頸をとる。〔巻九〕

＊石田が郎等二人落ちあうて、つひに木曾殿の頸をばとツてンげり。〔巻九〕

＊（敦盛は）「ただとくとく頸をとれ」とぞ宣ひける。〔巻九〕

以上の類型的表現群に対し二例しかない「ねぢきる」について、その使用法の特質を即座に導き出すことは難しい。そこでまず「ねぢきる」の意味についてまとめておく。

二　首を「ねぢきる」とは

冨倉徳次郎氏は首を「ねぢきる」について「頸骨を折って殺すことをいう。ここはそのようにしてから、首級を取ったのである。」[1]と指摘され、水原一氏もその考えを踏襲されている。[2]

「ねぢ（て）殺す」ならば、『今昔物語集』巻十一―十二「荘子行人家、主殺雁備肴語」の「不鳴ヌ雁ノ頸ヲネヂテ、殺シテ調テ、御肴ニ備ヘタリ。」や、『徒然草』一六二段の「大雁どもふためきあへる中に法師交りて、打ちふせ、捻ぢ殺しければ…。」等の用例がある。人に用いられた例としては、学習院大学本『平治物語』中巻に、

（義平）「…重病にをかされ力だにおちずは、終にはうたるゝ共、経房やうの者をば、二三人もねぢ殺してこそ死なんずれ…。」

がある。また『太平記』には「ねぢ頸にす」という表現が見出せる。

＊陶山…土屋を押へて頸をかかんとするを見て、道口七郎落ち合ひて陶山が上に乗り懸かる。陶山、下なる土屋をば左の手にて押さへ、上なる道口をかいつかんで、ねぢ頸にせんと振り返りて見けるところを…。（巻二十九）

＊相模守（細川清氏）走り寄つて、真壁を馬より引き落し、ねぢ首にやする、人飛礫にや打つと思案したる様にて、中に差し上げてぞ立たれける。（巻三十八）

前者は陶山が片手で土屋を押さえ付けながら、一方の手でもう一人の敵、道口を「ねぢ頸にし」ようとしている。後者は相模守の様子を見た伊賀高光が「あなおびただし、凡夫とは見えず」と思うほどの大力の表象ともなっている。「ねぢ殺す」や「ねぢ首にす」を敵の首をへし折る行為として読むのは自然であろう。しかし「ねぢきる」となると、

さて武士ども内侍所の鎖ねぢきッて、すでに御蓋をひらかんとすれば、たちまちに目くれ鼻血たる。〔覚一本巻十二〕

と言った用例もあり、読み手の印象は違ってくる。『今昔物語集』巻二十九―十二「筑後前司源忠理家入盗人語」の「二人ノ侍、大唐櫃ノ錠ヲ捻抜テ開テ見ケルニ…。」や、『宇治拾遺物

語』第二十七話の「駿河前司橘季通、…いみじう力ぞ強かりける。…門のもとに走り寄りて錠をねぢて引き抜きて…。」等の表現の延長にあると考えられ、切り離すという意味は拭いがたい。『弁慶物語』では、

武蔵坊、思ふやう、…斬り良さうなる浄海が細首打ち落とし、…付けたる縄をねぢ切らんと思ひける。

のように「縄をねぢ切る」という表現が四回繰り返されるが、その中で、

弁慶、心に思ふやう、…これほどの縄引き切りて、難波、瀬尾が細首ねぢ切り…。

と語られると、やはり文字通り「ねぢ切る」と読んでしまうであろう。そして威嚇・恫喝のために発せられたのに止まらず、[3] 実際に「ねぢきった」とされると、やや戯画的印象が生じてくる場合がある。それを次に見ていく。

三　源為朝の場合

「頸ねぢきッて」が一人の登場人物に一貫して用いられている例がある。それは金刀比羅本『保元物語』の為朝である。上巻の夜討進言の場面で、為朝は「舎兄にて候義朝計こそていたく防候はむずれ。それをば為朝まんなか仕て射通しなん。」と言い、自らの強弓が義朝に対して発揮されるであろうとし、「其外の奴原」については、

太刀引き抜きて真ん中にかけ入り、遠からん者をばさしおよびて手打に切つては落とし、薙ぎ落とし、払い落とし、近き者をば、腕摑んでひつ提げて、さげ切りに切つて落とし、切つては捨て、或いは頸捩ぢ切り、腕引き抜き、引き割きなどして、馳せ廻らば、行疫神はいざ知らず、誰かは面を向くべき。

と続ける。雑兵は強弓によらず「…切つては捨て、或いは頸捩ぢ切り…」と、力任せに倒していくというのである。そして中巻の合戦の場面で義朝の郎等鎌田政清に頬を射削られた為朝は、「余りのねたさに、答の矢を射るに及ばず、かひなぐつて投捨、弓を脇にかひはさみ」、鎌田を手取りにしようと追い始める。鎌田が逃げると為朝は、

をのれはどこまで。あますな。もらすな。掻い摑うで引き付けて、頸ねぢ切らむ。八割きに割いて捨てん。

と言って追う。「希有の命助かりて逃げのび」た鎌田は義朝の前で為朝に追われた恐怖を、

八郎御曹司、政清に一の矢を射られて、余りのねたさに、答の矢をば遊し候はで、「手捕にして割いて捨てん。ねぢ切つて捨てん」とて、追ひ懸けさせたまひ候ひつるは、天の雷の冑の上に落ちかかる心地して…。

と語るが、そこで「ねぢ切つて捨てん」という為朝の言葉を繰り返させているあたりに、語り手のこの表現へのこだわりが感じられる。それは下巻に入っても変わらない。近江国に隠れていた為朝は、「義朝を只一矢に射殺すべかりしを、助をきたれば、今は親の敵になりぬる事こそ悔しけれ。」と思いつつ、再起を期し再び義朝にまみえる事があれば、

義朝摑んで提げ、頸捩ぢ切つて、入道殿の孝養に手向け奉り…。

と考える。義朝もここに至ると「頸捩ぢ切」る対象とされてしまう。そして最後に為朝が実際に「頸捩ぢ切」る場面が用意される。重病を受けた後、湯屋で治療していた為朝を生け捕ろうと押し寄せた敵に対し、

為朝、騒がず、ずんと立ちて、三人手組みて寄る処を、三人ながら掻い摑うで、押し合はせ、ひしひし締め殺して、捨ててけり。また「さな言はせそ」とて、前後左右より続いて寄る二人をば、摑んで引き寄せ、頭と頭を打ち合はせ、ひしいで抛げて、一人をば湯桁に押し当てて、頸捩ぢ切つて、抛げ出だす。あるいは、拳にて胸突かれ、のけざまに倒れて死ぬるもあり。腰の骨踏み折られて這ふ這ふ逃がるる者もあり。

と一人大暴れする。強弓を引くということは大力であるわけだが、その強弓とは別に「頸捩ぢ切」るが為朝造型の一要素として終止用いられているのである。それは半井本には見出せない。金刀比羅本段階で確立した為朝の造型法であり、最強の武器である弓をわざわざ「脇にかひはさ」ませることで代わりに発揮される力でもあった。なお「頸捩ぢ切」る前に「ひしひし締め殺して、捨ててけり」とあるが、大力の者が相手を締めるという点では、覚一本巻十一「能登殿最期」の描写が思い浮かぶ。

安芸太郎を弓手の脇にとって挟み、弟の次郎をば馬手の脇にかいはさみ、一しめしめて、「いざうれ、さらばおのれら死途の山のともせよ」とて、生年廿六にて海へつッとぞいり給ふ。

他にも人を「しめる」という表現は、

＊組まれながら文覚、安藤武者が肘を突く。（安藤武者は）突かれながら、しめたりけり。たがひに劣らぬ大力にてありければ…。〔覚一本巻五〕

＊根井行親…（河口と船越の）二人を脇に挟んで、強くしめたれば、草葉の如くしてちとも働かず…。〔『源平盛衰記』巻三十五〕

等があるが、為朝のように「締め殺し」、「頭と頭を打ち合はせ」、「頸捩ぢ切」るまで一人の人物に描き込まれるというのは、他に多くの例があるわけではない。その少ない例に『平家物語』諸本における巴を挙げることができる。

四　巴の場合

覚一本巻九「木曾最期」の、

巴…御田の八郎におしならべて、むずととッてひきおとし、わが乗ッたる鞍の前輪におしつけて、ちッともはたらかさず、頸ねぢきッて捨ててンげり。

という描写は、この部分だけを見れば、巻七「実盛」の、

手塚が郎等おくれ馳せにはせ来ッて、主うたせじとなかにへだたり、斎藤別当にむずとくむ。「あッぱれ、おのれは日本一の剛の者とくんでうずなうれ」とて、とッて引寄せ、鞍の前輪におしつけ、頸かききッて捨ててンげり。

という描写や、

＊細川相模守清氏…言葉には似ず桃井が力弱く覚えければ、胄を引っ切つて投げ捨て、鞍の前輪に押し当てて、首掻き

切つてぞ差し挙げたる。〔『太平記』巻三十三〕

＊相模守（細川清氏）は鞍の前輪に引き付けてねぢ首にせられける野木備前次郎・柿原孫四郎二人が首を、太刀の鋒に貫いて差し挙げ…。〔『太平記』巻三十八〕

＊鞍の前輪に押し付け（閻魔の首筋をつかまえて）右へはキリリ、左へはキリリ、キリリキリリと押し回いてありしよな。〔狂言『朝比奈』〕

等のように大力の武士が敵の首をとる際の常套表現と捉えることもできる。しかし読み本系を見ると、巴の場合、別の表現群も有していたことがわかる。延慶本では、

武者二騎追かかる。鞆絵馬引へて待処に、左右よりつとよる。其時左右の手を差出して、二人が鎧の綿上を取て、左右の脇に搔ひ挟みて一絞め絞めて捨てたりければ、二人ながら頭をもじけて死にけり。

とあり、長門本では、

武者二騎追かけたり。ともゑ叶はじとや思ひけん。馬をひかへて待所に、左右よりつとよる。その時左右の手を差し出して、二人が胄のわたがみをとて、左右の脇にかいはさみて、一しめしめて捨てたりければ、二人ながら首ひしげて死ににけり。

とある。読み本での巴は敵を絞めるのであり、その結果、敵は頭が「もじけ」、あるいは首が「ひしげて」死んでいる。これが『源平闘諍録』になると、まず、

鞆絵…弓を腋に搔き挟み、太刀を抜いて額に当て、大勢の中に懸け入り、蜘手・十文字に係け破つて…、二人の敵を抓み、左右の腋に挟んで、二人の胄の鉢を打ち合はせ、微塵の如くに打ち破つて、湖に投げ入れ、…大勢の中に馳せ廻る。

という描写があり、「恩田の七郎宗春、大力の剛の者」が出てくると、

伴絵、叱耶宗春が押付の板を摑んで、鞍の前輪に押し着くると見れば、頸鋸ぢ切つてぞ抛げ捨ててんげる。

となる。こうなると為朝とほとんど変わらない。また次のような『弁慶物語』の描写、山本吉左右氏が指摘される「悲劇的叙事詩的な語り物のもどき・俳諧として発達して来たことを感じさせ」る表現[4]にも通じていく。

＊（弁慶は信濃の君を）弓手の小脇にかひこうで、一しめ絞めておめかせたり。

＊（弁慶は信濃君を太刀代わりにして丹後坊の太刀をあしらう。丹後は切りかかれないので太刀を捨て）むずと組まんとするところを、馬手の腕をさし出だし、鎧の上帯、胴の板に取りくはへ、中につつと差し上げ、一振り振りて、馬手の小脇にかひこうで、二人のつぶりをばはつしと鉦に打ち合はせ、南無阿弥陀仏と申しては、踊念仏を申しけり。

＊（弁慶が）脇に挟みたる二人の法師に言ひけるは、「我を恨みと思ふなよ。衆徒の好める道なれば、冥途の旅に赴け」と、つぶりとつぶりを打ち合わせ、微塵に二人が頭を打ちひしぎ、前なる池に投げ入れ、「南無三宝」と言ふままに、長刀の鞘を外し、西より東に一文字、北から南に十文字、蜘蛛手、かくなわ、八花形といふ物に割りつけ割りつけ斬

りければ、手にたつ者こそなかりけれ。

なお『源平闘諍録』では、

一条の次郎申しけるは、「『木曾殿の内に大力の女武者有り。相ひ構へて命を殺さず虜りて参れ』と、蒲の御曹司の仰せられしなり。命を殺さず手取りに為よ」と下知せられければ…。

と、巴を生け捕りにしようとしたことが語られている。この点も為朝と共通している。相手が大人数で生け捕りにしようと向かってくる設定があって、それに対し一人奮闘する誇張された描写も可能になる。また負けいくさでの奮戦であるため首をとっても論功行賞は期待できず、それゆえ首はうち捨てられてしまう。[5] そうした巴の戦いを際立たせている表現として『源平闘諍録』の「太刀を抜いて額に当て」も注目できる。以下にその用例を列挙する。

①『保元物語』金刀比羅本・巻中

武蔵国住人、金子十郎家忠…、弓をば肩にかけ、太刀を抜いて額にあて、為朝の陣のうちへをめいてかけいり、散々にかけまはる。

②『平治物語』金刀比羅本・巻下

雷おびたゝしく鳴りければ、難波の三郎…、太刀をぬきて額にあてうつほどに…、雷はたとなりおちにければ、難波三郎もちたる太刀なれば、しととうてども物ともせず、馬ともにけころされてぞふしにける。

③延慶本・二末

判官（兼高）片膝を立て、太刀を額にあてて、入らば切らむと思ひたりげにて、待懸たり。（長門本・『源平盛衰記』にも同様の表現がある。）

④延慶本・五本

千野太郎光弘…太刀の先につらぬきたる頸をば投げ捨てて、太刀を額にあてて、大勢の中に馳入り、散々に戦て、究竟の敵十三騎切伏て、終に自害してこそ死にけれ。

⑤延慶本・五本

（敦盛）いかが思給けむ、汀へむけてぞをよがせける。馬の足立ほどになりければ、弓矢をなげすてて、太刀を抜いて額にあてて、をめいて馳せあがりけり。（長門本・『源平盛衰記』にも同様の表現がある。）

⑥覚一本・巻九

熊谷親子は、中をわられじと立ならんで、太刀を額に当て、後へは一引も引かず、いよいよ前へぞ進みける。越中次郎兵衛叶はじとや思ひけん、とッて返す。

⑦『源平盛衰記』巻二十一

（重忠は）小次郎（和田義茂）に組で死なんとて打寄ければ…小次郎は太刀を額に当てて進寄。畠山同太刀を額にあてて、小次郎を待処に…。

⑧『源平盛衰記』巻四十二

武者一人（景清）長刀を額に当て飛で懸る。十郎（平家の侍）不叶と思て、貝吹て逃。

⑨『承久記』流布本・上巻「

（後鳥羽院方の討手の）四番に、一門成りける高井兵衛太郎とて寄たりけるが、余りに繁く被射て、馬を離れ、太刀

を抜て額に當て、只一人打て入る。

⑩『曽我物語』真字本・巻九

これら二人（曽我兄弟）、太刀を額に当てて走り回りける有様、小鷹なんどの、鶉・雲雀を追ひ立て追ひ立てするに異ならず。

①の金子十郎の場合、古活字本では「太刀を抜て真向にあて」となっていたり、妙本寺本『曽我物語』巻九で、

五良は打瞋て太刀をば額に当てて四方を見廻し立たりける有様、刀鈸毘沙門に異ならず。

となっている部分が、日本大学蔵本では、

五郎、太刀を真つ甲に当てて四方を見回し立ちたる有様、樊噲が鴻門に入りて、独り武を守りける勢ひもかくやと覚えてゆゆしけれ。

となっていることから「太刀を真つ向に当て」も用例に加えれば、

⑪『義経記』巻五

覚範が弓の鳥打をはたと射切られて、弓手へ投げ棄てて、腰なる箙なぐり棄てて…、三尺九寸ある太刀抜いて、稲妻の様に打振りて、真向に当てて喚いて懸かる。

⑫『義経記』巻八

打物取り持ち、鈴木三兄弟、武蔵坊、三騎轡を並べ、鎧の袖を顔に当てて、兜の鍬を傾けて、太刀を真向に押当てて、をつと喚いて駆けたりければ、秋風に木の葉の散るが如く、寄手の者共、元の陣へぞ引退く。

等を見出すことができる。さらに、

⑬室町時代物語『いしもち』

柏原、見るより今はかうと思ひて、打ち物抜いて眉間に当て、大勢の中へさつと入る。多くの敵を滅ぼしつつ、我が身もひしと痛手を負ひ、討ち死にしける。

といったバリエーションもある。これらはいずれも一人、もしくは少数で大勢に立ち向かっていく時、あるいは死ぬ覚悟をもって敵に挑んでいく際に用いられている。(6)

軍記物語は局地的個人レベルの戦闘で勝っても、戦争全体の中では敗北していく武士を描くことが一つの型になっており、為朝はその典型であるが、巴もまたその女性版と言える。古代から説話集などで語られる大力女の話は日常的な場面や水田などに関わるものが多く、大力の血筋にもこだわるものだが、(7)巴がいるのは戦場であり、その属性に農耕的雰囲気も見出せない。ただ巴の血筋は後世の伝承世界では語り継がれていく。巴はそれまでの大力女の系譜とは一旦切り離された新たな存在として位置付けられるのではないか。そして為朝や弁慶のように描かれていく方向性も有していたが、覚一本は「頸ねぢきッて」で象徴することで為朝や弁慶と一線を画すことができたと言えるのではないか。

五　重忠の場合(一)―宇治川の先陣争い

巻九「宇治川先陣」は、畠山重忠勢の渡河と佐々木高綱・梶原景季の先陣争いから成る章段で、構成は以下の通りである。

Ⅰ　水量を増す宇治川を前にしての重忠の進言。

Ⅱ　高綱・景季の先陣争い。

Ⅲ　渡河の途中、重忠が大串重親を対岸に投げ上げる話。
Ⅳ　対岸に渡った重忠が敵を討ち取る話。

Ⅳにおいて「木曽殿の家の子に、長瀬判官代重綱」と名乗る敵を重忠が、

「今日の軍神いははん」とて、おしならべてむずととッて引きおとし、頸ねぢきッて、本田二郎が鞍のとッつけにこそつけさせ…。

と語られているのであるが、ここでの「頸ねぢきッて」の用いられ方は、為朝や巴のように最後の奮闘の場で発揮された力ではないという点で大きな違いがある。後世、例えば室町時代物語『いしもち』や『はたけ山』でも、重忠の子重保が敵の首をねじ切る場面があるが、どちらも太刀を失うという条件が事前に設定されている。その上で大手を広げて敵を待ち受け、首をねじ切り、人飛礫を始めるのである。[8] 幸若『信田』の浮島太夫も長刀が折れたため、「大手を広げ駆け合せ、捩ぢ首、筒抜き、人礫、幹竹割に引つ裂」くという戦い方に移る。人飛礫にしても『太平記』巻八では「ただ一騎」となった妻鹿孫三郎長宗が武者を投げ飛ばし、巻十では、「主従ただ八騎」になった長崎高重が庄為久を「人飛礫」にした後、「太刀をも鞘に納め」、「左右の大手をひろげ」、「大童」となって敵を駆け散らしているように、多くの場合、劣勢の中で描かれる力であった。それらは奈良絵本『朝日奈』における義秀の「ねぢくひ、人つふて」という孤軍奮闘の戦いが、「あさいな一人たたこうとも、かひあるへきにあらされは」と語られるように合戦の勝敗に関わることはない。また『太平記』の「投討」[9]において敵の首をとらないことについて、「あはぬ敵」であるからという物語の説明はある。しかしそれは「あはぬ敵」だから投討といった誇張表現が可能になったとも言える。敗者の奮闘は、敗者になるという結果から逆に構えられた物語の枠組みだという見方もできる。[10] そうした後世の定型化された用い方に比べると、重忠の場合、唐突な感が否めない。しかし覚一本成立時に重忠に対するある理解により選ばれた表現であったはずである。その由来を探るために『平家物語』諸本における「宇治川先陣」から検討していく。

Ⅰは諸本間の揺れが少ない部分である。ここでの重忠の登場は、義経の「いかがせむ、淀、一口へやまはるべき、水のおち足をやまつべき」という発言がきっかけとなっている。延慶本では「渡サムトスル者一人モナシ。『イカヾスベキ。水ノ落足ヲヤ待ベキ』ナムド申処ニ」重忠が登場する。こうした形が早い段階で定まっていたらしいことは、『源平闘諍録』の叙述からも類推できる。それは重忠の「知食さぬ海河の俄に出で来たらばこそ、之に引かへて右は申させ給はめ」という言葉の中の「右は」の指す部分が『源平闘諍録』にはないからである。『源平闘諍録』が参照していた本文には、覚一本や延慶本のように渡河を躊躇する人々の言葉があったのであろうが、そこを省筆してしまったため、「右は」の一言が浮いてしまったのであろう。この〔人々の躊躇→重忠の登場・進言〕という形と併せ、重忠が「治承の合戦に、足利又太郎忠綱は鬼神でわたしけるか」と忠綱の先例を引く点も諸本一致している。これは巻四「橋合戦」で、平家の侍大将上総守忠清が、やはり水量の増す

宇治川を前にして「淀、一口へやむかひ候べき。河内路へやまはり候べき」と言うところに忠綱が登場し、かつて馬筏で利根川を押し渡した事を語って、真っ先に宇治川に入っていったことを踏まえている。また馬筏は「秩父、足利」が常に合戦をしていた際のものであることを忠綱に語らせている点も考え合わせると、「橋合戦」と「宇治川先陣」は、早くから結び付けられて構想されていたことが窺える。ただし忠綱の渡河譚と高綱・景季の先陣争いは、『平家物語』以外でも触れられることがあり、[11] 史実であるか否かの議論もあるところであるが、[12] 重忠の渡河に関しては『平家物語』以外で取り上げているもの、史実として裏付けることのできる資料等を見出すことはできない。

Ⅲは、川を流されていく重親と重忠のやり取り、重親が投げ上げられる岸辺の描写等の点で、読み本系は語り本よりも多くの言葉を費やしている。重親の名乗りも覚一本は「武蔵の国の住人、大串次郎重親、宇治河の先陣ぞや」であるが、延慶本では「河へ打入ル、事ハ畠山一番也。向ノ岸へ着事ハ、武蔵国ノ住人大櫛彦次郎季次マッ先也」となっており、長門本や『源平闘諍録』もほぼ同じである。そして「敵も御方も是を聞いて、一度にどッとぞわらひける」で話を結ぶ点で共通している。

この挿話は重親の意表を突いた名乗りとそれに対する周囲の哄笑という点から注目されがちだが、ここでは先陣という観点から捉え直してみたい。論功行賞の根拠となる先陣については実際の武士も軍記物語もこだわるところである。「宇治川先陣」も高綱・景季の先陣争いが主要テーマである。では「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣ぞや」という結果になってしまう物語展開において、重忠が担う役割は何だったのか。延慶本では、「畠山ニモ梶原ニモスヽムデ、マッ先ニゾ渡シタリケル」と、高綱先陣をより際立たせる表現になっており、「橋合戦」で忠綱が馬筏を組んで渡河する際の心得を指示したのと同じ役割を高綱に与えたりもしている。長門本では「佐々木四郎高綱、この河のまさき渡したりとて、（畠山勢の）五百余騎が中にはせ入たり、是を見て橋の下にひかへたる畠山も渡しけり」と、重忠の渡河も高綱の行動に促されてのものであるかのように描かれている。その上、重親の笑いを伴う名乗りの挿話が入ると重忠の功績は相対的に低められてしまう。

『源平盛衰記』ではそうした心配を考慮したかのような話が付加されている。先陣を名乗った重親は「悪く云ぬとや思けん、『一陣畠山、二陣大串』とぞ云直し」たが、重忠に「何に和君は重忠に助られて、重忠を蔑如にして、一陣とは名乗」と言われ、「争か其恩を忘べき」と弁解している。そして後に重忠が誅されることになった二俣川の戦いでは重忠討伐軍の中にいた重親であったが、「陣の前へは寄たれ共、弓を平めて帰けり。宇治川の恩を報ずとぞ見えたりける」と記すのである。この他、馬筏の心得を指示する役割を重忠のこととしたり、矢に当たった馬を肩に掛け川の中を進んだこと、重親以外の武士も岸に投げ上げたことを語り、「畠山、馬人三人、水の底にて助けるこそ由々しけれ」と、重忠を称揚する姿勢が強く出ている。一方『源平闘諍録』では、「梶原の源太・畠山も連て打ち上がりけるが、佐々木に先陣と称られて、心地悪しげにや思ひ

けん、二陣とも三陣とも称ること無かりけり。力に及ばざる事なり」と、意気消沈したであろう重忠の姿が描かれている。

Ⅰに比べると、Ⅲは『源平闘諍録』と『源平盛衰記』ほどの開きができてしまっている。そしてⅣの部分になると、延慶本、長門本、『源平闘諍録』では語ることもない。Ⅲで重忠を誇大に描いていた『源平盛衰記』も、「木曽が従弟に、信濃国住人、長瀬判官代義員」と名乗った武士に対し重忠が「かう平」という太刀を抜いて向かっていくと、「引退いて垣楯の中に入にけり。返合せ返合せ戦はんとしけれ共、畠山にや恐けん、かう平にや臆しけん、引退々々、都に向て落行けり」とし、重忠が敵の首を取ることはなく、むしろ「かう平」という太刀の威力に関心が向いてしまっている。

以上、宇治川の重忠勢渡河譚は創作の手を加えやすい箇所であることを見てきた。その中で覚一本が重忠に用意したのが「頸ねぢきッて」という表現であった。ただし両足院本のように「頸掻切て」とするものもあり、語り本系の中で安定して用いられている表現というわけではない。また巴のようにより誇張した描写をする諸本が別にあるというわけでもない。しかし覚一本には特有の設定もあった。それは「今日の軍神にいははん」という一言と結びつけている点である。そもそも重忠の合戦装束を語らない覚一本が、「長瀬判官代重綱」については「魚綾の直垂に緋威の鎧着て、連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍おいて」と説明するのはなぜなのか。『源平盛衰記』巻三十五で、内田三郎家吉と名乗進けり。巴は一陣に進むは剛者大将軍に非ずとも、物具毛の面白きに、押並て組、しや首ねぢ切て軍神に祭らんと思ひける…。

と語られているのが参考になろう。巴は相手の物具にひかれ軍神に祭るにふさわしいと判断している。また『保元物語』の為朝も、伊藤五・伊藤六に対し矢を惜しんでいたところ、首藤九郎に「清盛が郎従には、これ等こそ宗との者にて候へ」と言われ、「さらば、軍神に祭りて捨てよや」と言って矢を放っている。「重綱」の装束や馬・馬具の描写がある理由もこの点において理解できるのではないか。討ち取った敵の軍勢の首をさらす「切りかける」という言い方も覚一本には数例あり、それも軍神に祭るものと考えられているが[13]、一人の武士が軍神に祭るために直接手を下す場合は、それなりのこだわりがあったということなのであろうか。なお為朝や巴にも「軍神に祭る」と言わせているテキストがあることは興味深い。しかしどちらも負け戦の中での言葉であり、軍神に祭るために首を確保するということもない。先陣を務め、軍神に祭るため敵の首をねぢきり、それを保持する武将という、覚一本の重忠理解を支えたものについて続いて考えていきたい。

六　重忠の場合(二)―先陣を務める武将

重忠は実際に戦場でどれほどの功績をあげているのであろうか。敵の首を取るという点では、覚一本が巻九「落足」で、「畠山が郎等本田次郎」が平師盛の首を取ったと語っていること、奥州の合戦で藤原秀衡の子国衡の首をとったことが『愚管抄』巻五に「庄司次郎重忠コソ分入テヤガテ落合テクビトリテ参タリケレ」と記されている程度で、それらとても前者は他の

諸本では重忠の郎等とはされておらず、後者も、『吾妻鏡』文治五年八月十日条によれば首を取ったのは大串重親となっている。源平の合戦でも奥州の合戦でも、重忠が首を取ったとする伝えは覚一本の「宇治川先陣」だけである。

では首を取ること以外にどういう功績があったのか。「宇治川先陣」でそのテーマとなった先陣という点とその他の軍功について、源平の合戦、奥州の合戦の順で見ていく。

重忠の先陣について次のような伝えが読み本にある。一旦は頼朝に与力する三浦勢らと平家方として戦った重忠であったが、改めて頼朝のもとに参上するにあたり、白旗を掲げてきた。それは源義家が武衡・家衡追討の際、重忠の先祖、秩父武綱が白旗をもって先陣を務めたこと、また悪源太義平が叔父義賢を討った際、重忠の父重能が白旗を持って参上したことに拠ったものであった。この挿話は故実の内容や頼朝が重忠の参陣を認めるまでの経緯について、諸本により異なる伝えがあるが、重忠の参陣を許した頼朝の「サラバ我日本国ヲ討平ゲムホドハ、一向先陣ヲ勤ベシ」（延慶本）という言葉は、読み本系諸本、『源平闘諍録』が一様に記すことである。しかし平家滅亡までの間、重忠が先陣を務めたとする記事は、『吾妻鏡』治承四年十月六日条に頼朝が相模国に着いた際の先陣が重忠であると記されていること、『源平闘諍録』が富士川の合戦において、「爰に兵衛佐の先陣畠山次郎重忠、陣を賀嶋に取る」と記している程度しか見出せない。

続いて奥州の合戦における重忠を見ていく。『吾妻鏡』文治五年七月十九日条に奥州征伐発向の先陣として重忠の名がある。これは重忠が頼朝のもとに参上した際、話題にされた先祖の吉例に、奥州征伐に対し並々ならぬ思い入れ抱いていたと考えられている頼朝が[14]従ったものなのであろう。このことは『源威集』「八・泰衡征伐ノ事」で、「勲功抜群ノ輩、先陣畠山重忠」と、他に名の挙がる十四人の武士の筆頭に記されていたり、『義経記』巻八で「軍兵を率して、泰衡討たるべき由聞こえけり。既に討つ手を差遣はされけるに、先陣を望みける人々、千葉介、三浦介、上総介、狩野介、梶原源太をはじめて、我も我もと申しけれども、『善悪頼朝が計らひに叶ふまじ。八幡の御計らひなるべし』とて、若宮に御篭りありけるに、『畠山二郎』と夢想ありければ、畠山を始めて七万余騎奥州へぞ下りける。」という一挿話になる等、語るに値するものであったようだ。慈光寺本『承久記』では、軍の詮議を始めた北条義時が「故大将殿ノ御時、軍ノ先陣ヲバ畠山庄司次郎重忠コソ承シカドモ、其人共ハ今ハナシ。今度ノ先陣、誰ニカ有ルベキ」と語っているが、これも奥州の合戦でのことを踏まえたものであろうか。

また戦場とは別に、頼朝の二度の上洛の先陣を重忠が務めたことが注目できる。『吾妻鏡』建久元年十月二日条には、上洛の先陣を御家人たちが内々所望していたが、頼朝は重忠を考えていたところ「御夢想」があったので確信を得たという、『義経記』の語る趣向に類似する内容が記されている。十一月七日、後白河院が密かに車から見る中、重忠を先陣とした鎌倉勢が入洛した。このことは真字本『曽我物語』巻四や『源威集』「九・頼朝上洛ノ事」等でも取り上げられている。

建久六年、頼朝は二度目の上洛でも重忠を先陣とした。[15]『愚管抄』巻五が「スベテ庄司次郎ヲ頼朝ハ一番ニウタセウタセシテアリケリ。ユユシキ武者ナリ」と記すのは、頼朝の二度の上洛で先陣を勤めた際の重忠の印象をも踏まえているのではないだろうか。後世においても、室町時代物語『さがみ川』では橋供養に行く頼朝の先陣は、「秩父殿の佳例」ということで重忠が命じられたとし、幸若『景清』では、「建久元年に、君、初京上ましまして、二度の御上洛、同じく南都の供養を展べ給ふ。恒例なれば、秩父殿、先陣とぞ聞こえける。さる間、重忠、本田の次郎を召され、『いかに親経、承れ。今度も、重忠が先陣を給はる也』」と語られている。また幸若『みやこいり』のように、重忠の先陣の様子そのものが主要テーマになっている作品まである。

頼朝上洛において重忠が先陣として登用された理由として野口実氏は、重忠が京都でも一定の人脈を持っていたらしいこと、[16]都に慣れていた者とされていたこと、音楽の才能に恵まれていたこと等を踏まえ、「常に先陣を勤めた重忠こそ、容姿・体軀はもとより、その所作においても抜群のセンスを備えていたものと思われる」と指摘されている。[17]それは山本幸司氏が指摘される、頼朝の京都の事物や人材に対する好みという点[18]にも関わるものかもしれない。

次に先陣以外の軍功という点を確かめていきたいが、源平の合戦では特に目立った伝えを見出すことができない。鵯越の坂落しで重忠が馬を担いで降りた話が読み本系にある。しかし重忠は搦め手の義経のもとではなく大手の範頼の軍勢に属していたとする諸本の方が多く、[19]『吾妻鏡』寿永三年二月五日条も同様の伝えを記す。『源平盛衰記』になると当初、大手に属していた重忠が搦手にまわることになった事情をわざわざ記している。そうした操作をしてまで『源平盛衰記』が語りたかったことは、馬を担いで坂を下りるという重忠の怪力ぶりであった。それに対し大手に属したままでいる場合の重忠はどう描かれるのか。『源平闘諍録』は、熊谷・平山の「一二乃懸」、梶原の「二度乃懸」を記した後、「武蔵国の住人畠山の次郎重忠、五百余騎にて押し寄せて、一時計り闘ひけり。射白まされて引き退く。凡そ大手計りは人種尽くとも破れ難くぞ見えたりける」と記している。これらのことは源平の合戦において、重忠は特筆すべき軍功をあげていないのではないかということを推測させる。『吾妻鏡』元暦二年三月十一日条に、西海で大功を挙げ、頼朝より書を拝領した者として十一人の名が挙げられているが、そこに重忠の名はない。

では奥州の合戦ではどうか。工兵隊を組織し、鋤鍬で阿津賀志山の城壁前の堀を土石で埋め、その「思慮すでに神に通ずるか」とされ、また身命を捨て武威を振るったとされる十人の中の一人に重忠の名が挙げられてはいる。[20]しかし実際の戦闘が始まった阿津賀志山で三浦義村ら七騎に抜け駆けをされると、重忠は、自分たちが先陣を賜りながらそれを見逃してよいのかという郎等榛澤成清の諫言があったにも関わらず、それを許容してしまっている。[21]戦後、重忠に勲功の賞として与えられたのは、「葛岡郡」という「狭小の地」であった。それは恩賞が傍輩に広く行き渡るようにという「重忠が芳志」によるものとさ

れている。[22] この伝えは『神皇正統記』後醍醐の条でも、「頼朝ノ時マデモ、文治ノ比ニヤ、奥ノ泰衡ヲ追討セシニ、ミヅカラムカフコトアリシニ、平重忠ガ先陣ニテ其功スグレタリケレバ、五十四郡ノ中ニ、イヅクヲモノゾムベカリケルニ、長岡ノ郡トテキハメタル小所ヲノゾミタマハリケルトゾ。コレハ人々ニヒロク賞ヲモオコナハシメンガタメニヤ。カシコカリケルヲノコニコソ」と記されているように、重忠の理想化を推し進める材料にはなっている。しかし重忠に対する恩賞の少なさの理由は、重忠の人間性のみに求められるものなのであろうか。

源平の合戦、奥州の合戦を通し、合戦後の論功行賞で目立った伝えがないというのは、一つには重忠が戦場において、鎌倉武士としての武芸をアピールすることがあまりなかったのではないかということを考えさせる。『源平盛衰記』巻四十二、那須与一の扇の的の話では、与一の前に重忠が義経に召されているが、重忠は打物ならば相手が鬼神であろうと仰せを受けると言って辞退している。『吾妻鏡』には流鏑馬、笠懸、弓始などの記事が多く記されているが、重忠は伺候することはあっても射手になることはない。また『吾妻鏡』建久五年十月九日条に、頼朝が小山朝政邸に「弓馬堪能」の者を集め、旧記、先蹤を調べ、流鏑馬以下作物の射様の話をさせたという記事があるが、そこに集まった「弓馬堪能」の者十八人の中にも重忠の名はない。弓馬の芸がいかに鎌倉武士に求められていたかということについては高橋昌明氏の御指摘がある。[23] ただ流鏑馬や笠懸は競技であって合戦での力量とは直接結び付かないとする見方もあるかもしれない。しかし二俣川で重忠を射た愛甲季隆が射手に選ばれているなど、源平の合戦、奥州の合戦で功績のあった武士が流鏑馬や笠懸の射手を勤めているのもまた事実である。以上のことは、先陣を務めるのにふさわしい武将という以上の素材を重忠に見出すことが、覚一本にとって難しい作業であったことを推測させる。

七　重忠の場合(三)―異能の人

重忠には権威を憚らない、名と理を重んじる理想的鎌倉武士というイメージがある。[24] それは『吾妻鏡』の伝える重忠の言動によるところが多く、『義経記』や『曽我物語』において形象化されていくが、[25] そうした重忠像に関わる描写は『平家物語』諸本では、延慶本の「逆櫓」において「恥」という言葉を用いて景時を赤面させている程度である点が注意される。特に覚一本の重忠から理想的武人像を引き出すことは難しい。また巴や為朝のように大勢を相手に孤軍奮闘するという武士像も重忠には適用されない。それは子の重保の伝承において展開していく。では重忠の人物像として他にどのようなものが考えられるだろうか。

『源平盛衰記』巻三十四には、二里離れたところで佐々木高綱の馬、生唼の鳴き声を聞き分けたという挿話がある。また『吾妻鏡』建久六年四月五日条の重忠が栂尾明恵のもとに参向する記事では、遠くに煙があがったのを見た明恵の門弟が洛中で火事かと思ったところ、明恵は名のある勇士がやってくる気が表れたものだと語り、事実それは重忠がやってくるのを表したものであったことが記されている。これらは「二相」を知る

人としての重忠像へと収斂していく。

『いしもち』には、討手の稲毛入道に、自分の死後、天下は乱れるということを遺言として頼家に伝えよ、と重忠が言う場面があるが、それを聞いた人々は「重忠は二相の人、さもありなん」と語ったとある。幸若『景清』でも「二相神通の重忠」とされ、『高館』は、「弁慶、若君を抱き申、後れの髪を掻き撫で、『…若君の御果報あやからせ給はば、伯父頼朝に御あやかり候へ。戒力は御親父判官、弓は為朝の御弓勢、二相を悟つて悪魔の物の恐れんは、平の秩父にあやからせ給へ。…』」と、武士として備えるべき資質の一つとして二相を悟ることを、重忠の名と共に挙げている。さらに『ひらかな盛衰記』第三では「四相を悟重忠の御情」とまで語られてくる。しかし幸若『百合若大臣』で、「九夷は二相の者なれば、何とか思ふて引つらん。心の内も悟りがたし」、「蒙古ども、天の色をきつと見て、二相神通の者なれば、討手の向くと悟りたり」等、異国の不可解な能力を持つ者を指して「二相の者」とも言っている点は注意される。こうした重忠像を言い当てる表現としては、『義経記』巻六で言う「賢人第一異様の者」があろう。[26]

武士であるからといって誰もが平然と生首と向き合っていたわけではない。[27] しかし伝承の中の重忠は死者に向き合える異能の持ち主としても形象されていく。『さがみ川』では義経の怨霊と対話し、『判官物語』や幸若『含状』では義経の首実検の場で、義経の首の口から文を取り出す役目を負っている。[28] また「馬庭のつえになまくびたやすな、切懸けよ」の詞書で知られている『男衾三郎絵詞』が示す、生首を軍神に捧げるということの殺伐さや、[29] 討ち取った敵の生首の扱いについて、

＊後藤兵衛…首一つとつ付にかきてぞ出来たる。平山、これを見て、「や、殿、後藤殿。その首すて給へ。今日は首の不足あるまじ。さやうに取もちては、名あらん首をば誰にもたすべきぞ。はやくすて給へ」と申せば…。（『平治物語』・学習院大学本）

＊後藤兵衛…くびをとつて、「是は何に、長井殿。頭殿の見参に入るべきか、捨べきか。」といへば、「けさよりのりつからしたる馬に、なまくびつけて何かせむ。捨てよや」といひて…。（『平治物語』・金刀比羅本）

と描かれる場合があること等を踏まえると、軍神に祭るため首を「鞍のとっつけに」付けたとことさらに描くのは、覚一本が[30]重忠を理想的人物像の枠組みの中で捉えていくのとは別の出発点に立っていたことを示しているのではないだろうか。

八　重忠の場合㈣―孤高性と異質性

重忠に先陣を務める以外に活躍の場面を与えるとしたら、それは大力の発揮というのが易き方法であったのは『源平盛衰記』が示していた通りである。永福寺建立に関わり重忠の怪力ぶりが発揮されたことはよく知られている。[31] その力が人に用いられた話としては、梶原景時の謀反に参画して捕らわれた相撲の達者、勝木則宗が腰刀で波多野盛通を突こうとしたのを、重忠がその腕をへし折って止めたことや、[32]『古今著聞集』巻十「相撲強力」に採られた相撲人長居の肩の「骨とりひしぎ」[33]倒した話がある。西尾光一氏は後者の説話について、「強烈であ

り、やや陰惨でさえある。…長居が不具にされたので陰惨だというだけではない。話のなり行きの暗さが気になる」と指摘されるが[34]、そうした説話のトーンも覚一本の重忠像に重なるところがあるのではないだろうか。重親の名乗りに伴う笑いと重忠が敵の首をねぢきるという一対の描写は、那須与一において、扇の的を射た晴れやかな場が平家の老武者を射殺すことで物語の雰囲気を一変させてしまうことに通じるものがあるのではないか。『古今著聞集』は長居を倒した重忠が「座に帰り着く事もなく、一言もいふ事なくてやがて出で」てしまったと語る。そこには『愚管抄』巻五が「終ニイカナル納涼ヲシケルニモ、カタヘノ者チカク膝ヲクミテ居ル事エセデヤミケル者トゾキコユル」と語る重忠の孤高性を見て取れる。それは反逆者の系譜に連なる者という捉え方を支えるものでもあったのではないか。

『いしもち』に、重忠の母親が「坂東一の大力」とされている重忠を試す場面がある。そこで母親は、「まことに将門より伝わりたる大力にてましますか」と問うており、重忠が頼朝に随い上洛した場面では、「帝のさしきの御前」で「奈良の帝に九代、将門に四代、畠山の庄司次郎重忠」と自身でも名乗っている。『みやこいり』においても、重忠は自らの系譜を名乗る中で将門の名をあげている。また『はたけ山』では、重忠の郎等本田近経が「相馬の将門の御内なる、浮嶋のちう大輔かけ経に五代の後胤」と名乗っており、重忠と本田の関係は将門と郎等浮島との関係を受けたものとなっている。将門の後胤に重忠を位置付けるというのは、「橋合戦」の足利忠綱や延慶本三本に登場する佐井七郎が、将門を討った俵藤太秀郷の流れを汲む者であることを名乗っていること、小山朝政が将門を追討した秀郷の跡を伝える者として評価されていること等とは対照的である。[35]

また『いしもち』や『はたけ山』では、重忠・重保父子が妙見神に見放されたことを示唆する描写があるが、それは妙見神が将門を見限り千葉氏の守護神となっていくという『源平闘諍録』が記す伝承のあり様と類似している。なお『はたけ山』は、重忠の弟「いけかみの五郎」が、「五体は黒鐘のごとく、射る矢もさらに身にたゝす、さなから鬼神のごとくなり」であったと語るが、それは『太平記』巻十六や『俵藤太物語』などで伝えられる将門鉄身伝説に通じるものがあるかもしれない。[36]

重忠を将門に結び付けた理解の仕方は、無住の『雑談集』巻七「世間ノ人禮アレバ家ヲ治テ身ヲ全クス。禮ヲミダリ慢ヲ長ゼシ人、昔ヨリミナホロビ失ニキ。将門・純友・信頼・清盛等也。近比モヲゴレル人夭亡シキ。輪田・畠山ミナ其類也」や、『沙石集』巻四「昔の武士は王位をも奪はんとし、将軍の名をもけがさんとしき。将門の平親王といはれしが如し。畠山の重忠は館の中に烟を立てざりけるは、鎮守府の将軍を心にかけたりけるとなん言へり」といった受け止め方にも表れている。これらは無住が梶原氏出身であるということもあろうが[37]、謀叛の疑いをかけられた重忠に対し下河辺行平が鎌倉に出仕するよう説得した際の言葉、「貴殿は将軍の後胤なり。行平は四代将軍の裔孫なり。わざと露顕せしめ挑み戦ふに及ばんの条、その興あるべし」[38]に反応する重忠像を踏まえると[39]、反体制的人物とし

て造型されていく道筋も充分にあったであろう。[40]

『吾妻鏡』養和元年四月七日条に、御家人の中で頼朝の寝所の宿直に当たる者として「殊に弓箭に達する者、また御隔心なきの輩」十一人が選ばれたとあるが、そこに重忠の名はない。[41] ただしこの時は重忠が頼朝のもとに参陣した翌年にあたり、また十八歳という年齢を考えるとやむを得ないかもしれない。しかし『吾妻鏡』建久四年三月二十一日条、頼朝が下野那須野、信濃三原の狩倉に向かう際、「弓馬に達せしめ、また御隔心なきの族二十二人」を選んだ中にも重忠の名はない。建久元年の頼朝上洛において頼朝が院参した際、御家人十人が任官したが、先陣を務めた重忠はその選に漏れていることなども考え合わせると、建て前では頼朝に重用されていながら、ある距離が置かれている重忠の姿が想起される。なお重忠が当初より、頼朝には素直に従い難い状況に身を置いていたとする永井晋氏の御指摘もある。[42] 覚一本における重忠像の背景には、以上のような異質性が働きかけていたところもあったのではないだろうか。

覚一本に備わる叙情性[43]を踏まえた時、異質な感じが伴う「頸ねぢきッて」という表現について、大力の表象という点以外は、巴と重忠とでは用いられ方に違いがあること、またそれは、それぞれの人物造型に対する覚一本の立脚点を示すものではないかということを見てきた。またこの表現が他の近接する類型表現とは異なり、定型化した使用法にはなっておらず、そのことは即ち覚一本段階で使われ始めたのではないかということを推測させるものでもある。しかしひとたび使われると、後の伝承的作品群で大串重親を投げ飛ばしたことからの連想であろうか、「頸ねぢきッて」は人飛礫とともに重忠の息子重保、そして巴と巴を介してつながる三浦義盛・義秀に集中的に用いられる表現になっていく。[44] それはこの表現の印象の強さがその使用にあたっての規制力として働いたことを示しているのではないだろうか。

【使用テキスト】

『平家物語』覚一本（新編日本古典文学全集）・延慶本（勉誠社）・長門本（名著刊行会）・両足院本（臨川書店）・『源平盛衰記』（国民文庫刊行会）・『源平闘諍録』（学術文庫）・『吾妻鏡』（新人物往来社）・『保元物語』（新編日本古典文学全集）『平治物語』（古典文学大系・新日本古典文学大系）・『承久記』（新日本古典文学大系・新撰日本古典文庫）・『源威集』（東洋文庫）・『太平記』（日本古典集成）・『義経記』（新編日本古典文学全集）・『曽我物語』（東洋文庫、新編日本古典文学全集）・『今昔物語集』（新日本古典文学大系）・『宇治拾遺物語』（日本古典集成）・『愚管抄』（古典文学大系）・『神皇正統記』（古典文学大系）・『沙石集』（新編日本古典文学全集）・『雑談集』（三弥井書店）・『古今著聞集』（日本古典集成）・『徒然草』（新日本古典文学大系）・『さがみ川』（室町時代物語大成5）・『弁慶物語』『俵藤太物語』（新古典文学大系『室町物語集下』）・『いしもち』（『国文学未翻刻資料集』）・『はたけ山』（『幸若舞曲研究二巻』）・『みやこいり』（『幸若舞曲研究十巻』）・奈良絵本『朝日奈』（『三田国文』34）・狂言『朝比奈』（新編日本古典文学全集）・幸若『信田』『景清』『高館』『百合若大臣』（新日本古典文学大系『舞の本』）・『ひらかな盛衰記』（古典文学大系『浄瑠璃集上』）

注

（1）『平家物語全注釈下巻㈠』（一九六七）

(2) 日本古典集成『平家物語下』（一九八一）

(3) 威嚇・恫喝の言葉としてならば現代小説でも違和感なく用いられる。例えば北方謙三『武王の門』の「『惟村、その首を捻じ切ってくれるぞ。』武光の声が届いた。憤怒に満ちている、と惟村は思った。」等。

(4) 「『義経記』の弁慶」（『和光大学人文学部紀要』二号、一九六八・三）

(5) 首を捨てる例については、菊地暁氏「〈大路渡〉とその周辺―生首をめぐる儀礼と信仰―」（『待兼山論叢』二十七号、一九九三・一二）。

(6) 「太刀を額にあつ」が、どういう構えであるのかについて、「太刀を左右のどちらの方向にも素早く反応できるように、顔面正面に垂直に構えている（剣道でいう上段ではない）状態をいうのであろう」（近藤好和氏『弓矢と刀剣』・一九九七）という指摘が、また「真向にあつ」には「刀を額のところにあてて振りかざすさま」という指摘（日本古典文学全集『義経記』頭注）がある。ただ「当つ」には、「（ある方向に）向ける」という意味もある。「真つ向にさしかざし」という表現との違いと併せて未詳。

(7) 益田勝実氏「大力女の源流」（『日本文学誌要』三十七号、一九八七・七）、浅見和彦氏「女の大力―東国女の系譜」（『成蹊国文』三十八号、二〇〇五・三）等。

(8) 『いしもち』『はたけ山』における重保の戦いぶりとその伝承については、徳田和夫氏「畠山氏の物語と奈良絵本『いしもち』―六郎重保の伝承と語り物―」（『お伽草子研究』・一九八八）。

(9) 近藤好和氏の用語による（『騎兵と歩兵の中世史』・二〇〇五）。

(10) 拙稿「源為朝論―我一人世ニアラン―」（『日本文学』一九九四・九）

(11) たとえば『保暦間記』は忠綱の渡河、高綱・景季の先陣争いを記すが、重忠の渡河については触れていない。

(12) 前者は冨倉徳次郎氏『平家物語全注釈上巻』（一九六六）、梶原正昭氏「『平家物語』の一考察―「橋合戦」をめぐる史実と文学」（『軍記物とその周辺』・一九六九）が基本的問題を整理されている。近年では野口実氏「橋合戦における二人の忠綱」（『文学』二〇〇二・七―八）、日下力氏『平家物語転読』（二〇〇六）がこの問題に触れられている。後者は大津雄一氏「宇治川の先陣争いは実際におこなわれたのか？」（『国文学』一九八六・六）でまとめられている。

(13) 生嶋輝美氏「中世後期における『斬られた首』の取り扱い―首実検と梟首を素材として―」（『文化史学』五十号、一九九四・一一）。

(14) 川合康氏『源平合戦の虚像を剝ぐ』（一九九六）、山本幸司氏『日本の歴史9　頼朝の天下草創』（二〇〇一）等。

(15) 『吾妻鏡』建久六年二月十日

(16) 『源氏と坂東武士』（二〇〇七）

(17) 「鎌倉武士と報復―畠山重忠と二俣川の合戦―」（『古代文化』五十四号、二〇〇二・六）

(18) 『頼朝の精神史』（一九九八）

(19) 谷口耕一氏「長門本平家物語の再評価に向けて―一谷の坂落としをめぐる長門本と延慶本」（『海王宮―壇之浦と平家物語』・二〇〇五）。また義経による坂落としそのものへの疑問も菱沼一憲氏『源義経の合戦と戦略』（二〇〇五）ほかの指摘がある。

(20) 『吾妻鏡』文治五年八月七日・八月十日

(21) 『吾妻鏡』文治五年八月八日

(22) 『吾妻鏡』文治五年九月二十日

(23) 『武士の成立　武士像の成立』（一九九九）

(24) 貫井達人氏『畠山重忠』（一九六二）

(25) 徳竹由明氏「『義経記』における畠山重忠」（『三田国文』三十三号、二〇〇一・三）、山西明氏「曽我物語在地性の変容と保持―畠山氏説話を中心として」（『国語と国文学』一九八四・二）、源健一郎氏「仮名本曽我物語と関東Ⅰ―畠山重忠の在地性をめぐって」（『曽我物語の作品宇宙』・二〇〇三）等。

(26) 幸若『みやこいり』では、重忠を「日ほん一はんのいやうのもの」としている。文脈では「威容」とも取れるが、仮名遣いや用例を踏まえると「異様」の可能性もある。

(27) 生嶋輝美氏「鎌倉武士の死刑と斬首―『吾妻鏡』・軍記物にみるその観念と作法―(上)(下)」(『文化史学』五十四・五十五号、一九九八・一一、一九九九・一一)

(28) 福田晃氏『中世語り物文芸―その系譜と展開―』(一九八一)

(29) 黒田日出男氏「首を懸ける」(『月刊百科』三一〇号、一九八八・八)。また本郷和人氏は『武士から王へ―お上の物語』(二〇〇七)で、絵巻の男衾三郎と畠山重忠との関連を指摘されている。

(30) 「鞍のとッつけ」に首を付ける例については、菊池暁氏注(5)。

(31) 『吾妻鏡』建久三年六月十三日、建久三年九月十一日、十一月十三日

(32) 『吾妻鏡』正治二年二月二日

(33) 「ひしぐ」は金刀比羅本『保元物語』の為朝、長門本の巴にも用いられていた。

(34) 『鑑賞日本古典文学　中世説話集』(一九七七)

(35) 『吾妻鏡』治承五年閏二月二十三日・元久二年八月七日。秀郷流の武士達のあり様については野口実氏『伝説の将軍　藤原秀郷』(二〇〇一)に詳しい。『源平闘諍録』で千葉成胤が平家の方人藤原親正に向かい「平親王将門には十代の末葉」と名乗っていることについては未勘。

(36) このあたり将門と鍛冶との関係が推測されているように(谷川健一氏『鍛冶屋の母』一九七九)、畠山氏と鍛冶、また妙見神との関わりがあるか(井上孝夫氏「畠山重忠と鉄の伝説」・『千葉大学教育学部研究紀要48巻　II人文・社会科学編』、二〇〇〇・二)。また秩父氏に近い金子党にも砂鉄との関係が指摘されている(鈴木国弘氏「『十郎家忠』からみた金子村山党の歴史的位置―治承寿永内乱史の一コマ―」・『史叢』六十二号、二〇〇〇・三)。

(37) 大川信子氏「真名本『曽我物語』試論―梶原景時描出の背景をめぐって」(『常葉国文』二十四号、一九九九・二)

(38) 『吾妻鏡』文治三年十一月二十一日

(39) 川合康氏、注(14)に同じ。

(40) 野口実氏は注(17)において「名誉感情が過剰でしばしば謀叛の噂のたつ重忠は、反権力的・自立的な厄介者と捉えることも可能であり、おそらく今日的価値観からすれば、このような側面においてこそ、重忠は評価されることになるであろう」と指摘されている。

(41) この十一人については本郷和人氏『新・中世王権論』(二〇〇四)が「後に家の子と称されたグループの原型にあたるのではないか。頼朝の家の子とは、いわば頼朝の親衛隊ではなかったのか」と指摘されている。

(42) 『鎌倉幕府の転換点』(二〇〇〇)

(43) 覚一本の有する叙情性については松尾葦江氏『平家物語論究』(一九八五)に収められた一連の御論考がある。

(44) 源健一郎氏「巴の変貌―大力伝承の共鳴―」(『日本文藝研究』五十六号、二〇〇五・三)